

2020年9月11日

荇田南2丁目の皆様へ
KP(神奈川精神医療人権センター)便り⑬

KP 会長の藤井哲也です。荇田南2丁目に立ち並ぶヘイト幟旗の撤去を求める私たちの活動は、開始からまだ4か月にも関わらず、神奈川新聞、共同通信、産経新聞、信濃毎日新聞などに大きく取り上げられ、現在もテレビの取材希望が相次ぐなど、注目を集めています。今月2日には、私のインタビューをもとにした記事が、東京新聞神奈川県版のトップに掲載されました。私の病気発症から9回の入退院を経て、リハビリに至る壮絶なメンタルサバイバル体験が紹介されています。

今回の記事を読む一般社会の方々には、私の体験をどのように捉え、どのように感じるのでしょうか。私は、私のような人生を他の人にも歩ませたいとは思いません。そのためには、精神医療の質の改善はもとより、患者を孤立に追い込むこの社会をどのように変えていかなければならないのか、ぜひ多くの人に考えていただきたいと思っています。

私共、精神障害当事者・ピア有志がKPを立ち上げて、早くも4か月が経ちました。この間、KPの携帯に全国からかかってくる相談電話への対応や、諸活動に私たちは全力で取り組んできました。

今、正直思うのは、活動の成果を得ることが予想以上に難しいということです。

荇田南のグループホーム反対運動では、私たちは頻繁に現地を訪れ、近隣住民にチラシを配ることで、精神障害当事者への理解を求めてきました。しかし、ヘイト幟旗は一向に減りません。意識の隔たりや溝の深さを感じます。どうしたらその溝を埋められるのか、難題や課題が山積しています。

私たち精神障害当事者は、KP活動を通して、こうした社会の無理解や差別の牙と直に向き合うことになりました。誰もがフラットな視線で生きていける社会は実現できるのだろうか。KP活動に力を入れれば入れるほど、悲観的な思いが強まっていきます。でも諦めません。いつか行く未来に「障害者」という言葉が意識されない社会が到来することを願い、私たちは活動を続けていきます。

精神障害者を獰猛な野獣のように危険視するヘイト幟旗を立て続ける行為に対して、荇田南地区の住民の皆様からも、戸惑いや怒りの声が私たちのもとに多く寄せられています。「同じ住民として恥ずかしい」「この地域にも以前から精神障害者が暮らしている。あの旗は許せない」などのご意見です。そうした皆さまのご自宅にまで、チラシを毎回投函するのは心苦しいのですが、地域全体でこの深刻な問題と向き合うきっかけにさせていただけると幸いです。

神奈川精神医療人権センター (KP)

携帯 080-7295-8236 (毎週月から金 13時～16時)